
さよならを言いに

大輔(だーすけ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならを言いに

【Nコード】

N5192Y

【作者名】

だいすけ
大輔

【あらすじ】

俺君シリーズ第10弾。「体温が分からなくても、ちゃんとそばにいるから」

何も覚えてないのだけれど
幸せな夢だった。

「重ねた手が透けていた」

ふと意識が無くなった気がしたのに、気付いたら部屋の中。見たことはないのだけど、見下ろしたら見たことのある姿。

「あ……」

愛しい姿に触れてみれば、軽く身じろぎをした。微かに分かるようだ。

手を見れば透けている。何故だか幽体離脱をしてみたようだ。

「大好きだ」

伝わらない声で呟く。君には届かないんだけど、無性に言いたくなつたんだ。

「好きだ、でももうこれと言えないくなるんだな」

もつと言ったときやよかった、なんてもう遅いんだよ俺。君も恥ずかしがってなかったら、後悔することも無かつただろうに。

「夢の中でも覚えて居ればいい。俺がこうして髪を撫でたこと、好きだと言ったこと、全て」

目が覚めたら白い天井。

いつもの風景だ、個室で体にチューブが繋がっている。

突然の吐き気。深呼吸して鎮めれば、もう駄目なんだろうなと思った。

静かに音を立ててドアが開くと、そこには数少ない家族が居た。

「姉貴、」

「やっと起きた。来たら寝てるし……心配したんだからね」

「ごめんごめん」

10時ということもあり、日はそこそこ高い。君は何を見ているだろうか、青い空を見て思う。授業をサボって、同じ天井を見ているだろうか。

「具合は？」

「最悪。でもなんか良い夢見た」

「彼女？」

姉の言葉にニツコリ笑い返す。姉もまたそれを見てニヤリとした。

「可哀想ねー、放課後デートも出来なくて」

「本当だよ！でもあいつじゃ恥ずかしがって無理だ」

俺が笑っただけで照れるんだもの。自惚れじゃない、端から見ても明らからしい。

「あら、残念ね」

普通なら「いつか出来るよ」って続くのかもしれない。だけど俺には今しかないから、そんな無責任なことは言われないし、言わない。

おちゃらけて、すらも。

君はこんな俺を見てどう思うだろうか。君は悲しんでくれるだろうか。

想像もつかないほど途方もない時——俺にとっては短いけれど永遠に分からない——を思いやって、俺は笑った。

自嘲とも苦笑とも分らない笑い。

青い空を見て、俺と正反対だと思った。君とも正反対だ。だって俺はずっと曇り空のままできた。

だから君は後悔するかもしれないけど、雲にしかねなかったんだから仕方ない。

夢を見た君はどうしてるかな。目蓋の裏で言葉を言う俺を見つける

のかな。

君の気持ちが出来ない俺は、真っ白で自身の存在すら分からなくなりそんな空間に漂った。

せめて「恋人」らしいことをしたかった、と呟くに呟けない台詞も共に。

気付いたら眠っていたんだろう。そしてまた見慣れた部屋と、愛しい姿。

「あと残り少ないんだ」

そう零して眉を下げる。触れても身じろぎもなくなった。気持ちも存在も段々薄れゆく。

「もっと触れたいのにな、気付いてはくれないんだね」

髪を梳くも、少し触った感覚があるだけ。前回のよう髪にしっかりと触れることも持ち上げることも出来ない。

「これが最後かな」

泣くことさえしないけど、それでも悲しいんだ。

でも君の頬に涙の跡が見えた気がした。

「よっ」

そう言っ来て来た友達に、彼女のことを頼むと話す。

「うん、任せられた」

前なら「諦めんなよ、お前なら大丈夫だから」って言われただろう。だけど今の状況を彼も分かっていたようだ。

「ありがとう、最後まで」

「親友だろ、もっと頼ってもいいんだぜ？最後まで親友らしいことさせてくれよ」

照れた表情の友達に、俺は少し泣きそうになった。

「ありがとう」しか言えないけれど、泣くことはしなかった。泣いたら本当に終わりの気がするから。

「あれ？」

寝ていたはずの俺は君の部屋にいて、いつもと違って君は俺の前に立っていた。

少し開けた窓から、微かに夜の匂いを孕む風と月明かりが差し込んでいる。

「なんで居るの？」

君には見えているんだね。はっきりと分かる最期を迎える俺が。

「会いたくなっちゃって」

「夢……？」

「夢見てる時間だけど夢じゃない」

目を擦って確認する君が愛しくて、我慢出来ずに抱きしめた。

ちゃんと抱きしめることが出来る。まるで自分の身体に入っているかのように。

「どうしたの？」

「抱きしめなくなっちゃって」

「何それ」

笑う君に、もうすぐ死ぬなんて言えなくて、君はまだ生きると思っ
ていて。

「大好きだ、ずっと一緒に居られればいいのに」

パツと顔を赤らめる。だけど”今”言わなくちゃいつ言うんだ。

「ねえ、ちゃんと聞いて。俺は君のこと愛してる。だから忘れない
で欲しい、今の言葉を」

「どういうこと？」

「放課後デートとか、旅行とか、そんなの今更だ。それに俺は君と
居たことが思い出だし。だから、」

一息置いて告げる。

「俺が死んでも俺のこと忘れないで」

「それ、どういう、」

お願い。

そう言つて俺は君にキスをした。未練を残さない、軽い口付け。そうすれば、もう時間だ。

「伝えきれなかったことを伝えに来た。俺はずっと君の側に居るから、寂しくなったら話しかけてよ」

俺はここに居るのにね、君にはもう見えないんだ。

震える携帯を開き、耳に当てる。漏れる声は間違いなく親友で。

『あいつが危篤だ!!』

その言葉に、俺は自覚した。ああ、本当の身体に行かなければ、と。

行つたところですぐ追い出されるのは目に見えてるが。

「すぐ行く!」

着替えようとしていた君の部屋から、俺は消えた。

ありがとう、そう伝え損ねた。だから待っていたよ、君が来るのを。

「さつき、ぶりだね」

必死で聞いているのが伝わる。

「ひとつ、言い損ねたことが……ありがとう、俺と一緒にいてくれて」

そして、目を閉じた。

——隣に居る。

ずっと側にいる。

だから泣き止んで。

重ねた手は、透けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5192y/>

さよならを言いに

2011年11月17日21時32分発行